

点滴チューブを利用した ニラの合理的なかん水施肥技術



写真 試験状況 (2008年1月16日撮影)

表1 かん水量・かん水間隔およびかん水中窒素濃度とニラの収量
(2007年11月6日～12月18日)

かん水量および かん水間隔	かん水中 窒素濃度 (ppm)	1番刈り時 の収量 (t/10a) ^{Z)}	収量比	かん水量 (t/10a) ^{Y)}	窒素施用量 (kg/10a) ^{Y)}	指数(%)
200mL/株・日	50	1.35	154	66.7	3.3	55
1,000mL/株・5日	50	1.09	124	68.8	3.4	57
200mL/株・日	100	1.72	196	64.9	6.5	108
1,000mL/株・5日	100	1.71	195	64.8	6.5	108
慣行 ^{X)}	—	0.88	100	60.9	6.0	100

注) 供試品種: 'スーパーグリーンベルト'

Z): 未調整新鮮重、栽植密度7,500株/10aで算出。

Y): 栽植密度7,500株/10aで算出。

X): 頭上パイプかん水により、1,400mL/株・7日(10.5t/10a・7日)をかん水。

施肥量: 刈り採り直後、有機化成配合肥料(7-8-5)をマルチの上からふり肥で施用。

現在、ニラでは、頭上かん水を前提として、基肥は全層施肥、追肥はマルチ上からのふり肥とする肥培管理が行われています。しかし、この方法で追肥を行うと肥料成分の畝内への移行むらや畝外への流亡が大きくなり、施肥効率は悪くなります。

近年、点滴チューブによる施肥・かん水も行われ始めましたが、適正なかん水量や施肥量等は明らかになっていません。

そこで、点滴チューブを活用した合理的

なかん水施肥技術を確立するため、栽培試験(平成18～19年度)を行っています。

本年度は、0番刈り以降の追肥とかん水量およびかん水間隔について試験を行っています。1番刈り時の収量は、すべての点滴かん水区で慣行区に比べ収量比で124～196となり、この時の窒素施用量は慣行区の55～108%でした(表1)。引き続き2番刈り以降の生育、収量への影響を調査します。

(土壌肥料担当 岡林美恵 088-863-4915)